白い野帳

新田次郎

朝日新聞社刊

新田次郎（にった・じろう）
本名　藤原寛人。明治45年長野県生れ。無線電信講習所本科（現電気通信大学）卒。昭和30年無線ロボット雨量計を発明。運輸大臣賞を受ける。現在中央気象台測器課長。勤務のかたわら小説「強力伝」で30年後期（第34回）直木賞受賞。以来幅ひろい作家活動をつづけている。
現住所　東京都武蔵野市吉祥寺北町1—14—15

白い野帳　定価 450円
昭和40年3月20日　第一刷発行
著　者　新田次郎
発行者　浜名二正
印刷所　精興社
発行所　東京 大阪 北九州 名古屋　朝日新聞社

© 新田次郎　1965 年

白い野帳

目次

秋

キノコ取りの名人　9
晩秋の霧　12
ツグミの腹時計　16
一九〇二年　20
科学者らしからぬ科学者　23
立読み天国　27
タチバナモドキ　30

冬

初冬の山　35
クダンというばけもの　38
私の大みそか　42
待ちどおしい年賀状　46
富士山頂から東京を見る　49
行事つづきのお正月　53
天下一品凍り柿の味　56

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

冬富士の突風 59
寒さが身にこたえる話 63
馬小屋に埋められた人 66
雪の中へほうり出された話 69
ドイツかしわの戸籍調べ 73
お祖母さまの編棒 76
都会の憂鬱 80
神秘な暗黒 84
山の遭難は防げないか 88
冬山はそっとしておけ 91
雪の日のエメッカ 95

春

さむさむおヒナさま 101
〃世界一〃のピッケル 104
雪の中のお別れ 107
ささやかな実験 110
ヘビとりじいさんの季節予報 114

生涯で最もこわかった話 123
春を告げるコブシの花 120
連休と山の遭難 117
富士山頂からスキーで
　すべり降りた最初の人 162
八十八夜の別れ霜 159
のっこ、のっこと「よだ」がやって来る 154
科学者の書いた随筆 152
茶室に入れられた地震計 148
バランスをくずしたら一巻の終り 144
トゲを一升ますいっぱい抜いた話 141
早春の山 137
山男の本物と贋物 134
仏桑花 130
切腹座敷 127

夏

気象庁とヘビ予報 167

ほろびゆく自然 170
青い目のお客さん 173
カバンの掛け方 177
八月十五日の刃傷 180
天の火をおそれる 184
富士山頂で落雷にあう 187
雷が鳴ったら蚊帳に入れ 190
迷走台風 194
強力とヘリコプター 198
いのり釘 202
峠 206
天佑神助 210
臭い語源 213
サルの出る温泉場 217
乾いた空気 221

再び秋

秋のおとずれを 227

税関吏のウインク 229
地バチ取りの話 234
地震予知のカギさがし 237
栗の実拾い 241
地図でない地図 244
富士山頂に思う 249
死んだと思った川が生きていた 252
狂風小説ならず 255
カマイタチ 258
晩年 262
山の幸を求める 269
キノコ取り名人について 272
あとがき 276

装幀・カット　鉄指公蔵

……

秋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

キノコ取りの名人

マツタケが八百屋の店頭に見られるようになると朝夕が急に寒くなる。

キノコの取れる年は凶作だという人と、豊凶に関係ないという人がある。凶作説をとなえる人は、キノコのよく繁殖するような年は平均して雨が多い、雨が多いということは凶作につながるという。

キノコはどちらかといえば、ひかげを好むけれど、必ずしもじめじめしたところばかりを好むとは限らない。マツタケなどはむしろ水はけのいい乾燥した斜面を好むようだし、あまりうまくはないけれど、乾して食べるキノコで、湿地だけにしか生えないキノコもある。キノコほど種類が多く、その呼名がところによって違っているものはほかにはあるまい。

沢をひとつ越えて隣の村へ行けば、もう名前が違っていることがある。同じ村の中でも、人によって違う呼び方をしているキノコだってある。どこへ行っても共通な名前で呼ばれ、かたちも同じキノコは、マツタケ、シイタケ、クリタケぐ

らいのものでシメジとなると、そろそろ共通性があやうくなる。一本シメジというのは、ぽつん、ぽつんと生えるやつで、できる場所によって食べられるのと猛毒を持っているのに区別される。

私は子どものころからキノコ取りの名人であった。私の生れ故郷なら、どこの山にどんなキノコが生えるかはそらんじていた。その私がある秋のこと、この一本シメジを沢ひとつ越えて向うの、私にとってははじめての山で取って来た。この一本シメジに私の家中が当って大変なめにあった。キノコの中毒というのはものすごく苦しいもので、そのあとが悪い。私の弟はそれ以来、胃を悪くして完全になおるには五年もかかった。

キノコに中毒すると、庭の桜の木の皮をはいで、せんじて飲めばいいとされていた。その夜、皮をはがれた桜は今もなお、生家の庭にある。同じキノコでも場所によって中毒するのとしないのがある。裏山に千本シメジが出来た。千本シメジというのは一カ所に群生するやつで、一山あてればびくにいっぱいになるほどとれる。裏山の千本シメジの毒性については先祖代々語り伝えられていたから、見つけても取らなかった。ウスムラサキという美しい名前が、この毒キノコにつけられていた。よくよく見ると、カサがややウスムラサキがかっていて、本シメジとは違っていた。村の人はよく知っていて、だれも取らなかった。

中学も上級生になったころだった。キノコ取りの帰りにちょうどここを通り合

わせたら、知らない老人が、このウスムラサキを取っていた。毒だからやめろと教えてやったが、なかなかやめないから、私が取って来た本シメジを腰びくから出して、ウスムラサキとくらべて見せてやった。すると、その老人は、いきなり、そのウスムラサキを口に入れてかんで、吐き出してから

「ほんとだ、てめえのいうとおりだ。このキノコは煮ても焼いても食えねえぞ」といった。

私がキノコ取りの名人になったのは、私の祖父がキノコが好きで、いいキノコを取って帰るとたいへんほめてくれたからである。マツタケ、クリタケを除いて、知らない山で取ったキノコは一応、毒キノコだと思ったら、まず間違いがないというキノコ取りの奥義にも達した。

マツタケは松山のきまったところにしかできないし、クリタケはクリのくさりかかった切り株にしかできないから、名人になるには、せっせと歩いてその場所を見つけねばならない。いい場所を見つけたら人には教えずに、自分だけこっそり取りにいって、子坊主（小さいキノコ）は取らずに、落葉をそっとかけて帰って来るのがコツである。

村にキノコ取りの名人が何人かいた。みんなお年寄りで、山から出て来る時はいつも腰びくをキノコでいっぱいにしていた。この名人のあとを尾行したことがあったが、うまいこと途中で、まかれてしまったばかりでなく、クマバチの巣の

ところへ誘導されて、ひどい目にあったことがある。人のあとをつけるのは、キノコ取りのおきてにそむくことであり、決してフェアーなやり方ではないことを身をもって教えられた。

一昨年の秋、ちょうどキノコの出盛りのころ帰郷したので、キノコ取りに出かけたが、三十年前と今では山がすっかりかわっていて、さっぱり取れなかった。しょうがないから、その翌朝は現在、村で一番キノコ取りの名人だといわれている捨雄さんにたのんで、シメジ取りに案内してもらった。

未明に起きて、露にぬれて山にはいるところまでは昔も今も違いがなかったが、さあこの辺にあるぞと教えられても、さっぱり私にはキノコが見えなかった。捨雄さんが二十本も取る間に、私はやっと五本しか取れなかった。昔のキノコ取りの名人もだめになったものだと捨雄さんにひやかされ、山を出ると、もう日が高く上っていた。

晩秋の霧

明けがた、寝床から離れがたいのは四季を通じていつも同じである。私なんかは、三べん起されないと起きない。家内もよく心得ていて、一度、二度は形式的

な起し方しかしないけれど、三度目になると、マクラ元へ来て時間ですよと怒鳴る。ぐずぐずしていたら、マクラをけとばしかねないけんまくにおそれをなして、いやいやながら起上る。もうこんな時間かいと、起さなかった方が悪いような顔つきで起きるけれど、実際は家内の最初の一声で、たいがいは目を覚している。ごくまれには、家内より先に目を覚していることだってある。

今朝もそうだった。夢ともうつつともつかないまどろみの中で、私は汽笛を聞いた。

（製糸工場の汽笛が鳴ったぞ、もう起きねばならない）

私は自分にそういいきかせながら、もっと寝ていたい欲望とたたかっていた。やっとのことで目を覚して、私は夢と現実との間の三十数年のへだたりを見たのである。

私の生家は、諏訪市の中心部から高度にして約三百メートル、直線距離にして三キロメートルほどへだたっていて、家の庭から諏訪盆地の一部を見おろせる場所にある。私はここから、小学校、中学校を通じて、往復約八キロメートルの道を十一年間、通いつめたのである。

私の子どものころは製糸業が盛んで、工場の作業開始の合図に汽笛を鳴らした。小学生のころは早起きだったが、中学生になると寝坊になった。製糸工場の汽笛は学校が始る時間よりも、だいたい一時間前には鳴るから、この汽笛を聞いてと

び起きて、食事をして、走っていけば、どうにかこうにか学校に間に合った。

あれだけ離れていて聞えるぐらいの汽笛だったから、近所ではその音でずいぶん迷惑した人もあったに違いない。その中学生のころの朝の感覚が突然、今朝ほど舞いもどって来たのである。夢ではなく、どこかでほんとうに汽笛が鳴ったのかも知れない。あるいは汽笛と聞き違えられるような物音がしたのかも知れないと耳をすませていたが、しんとしてなにも聞えなかった。

眠れそうもないから起きて外をのぞくと、外は濃い霧だった。それに寒い。霧を見て私は同じようなことが前にもあったことを思い出した。晩秋の、今朝のような日の朝、夢うつつの間に思い出の製糸工場の汽笛を聞いて目を覚したことがたしかに何度かあった。

ボーッと長く尾を引いて鳴る汽笛の音は、けっして威勢のいいものではなかった。むしろ人生にあきらめを強いているふうに聞える汽笛だった。哀調を帯びた余韻が消えると、私はこれではいけないというような気持で立上がったものだった。

製糸工場の汽笛は秋ばかりではない。春も夏も冬もずっと鳴り響いていたのに、なぜ晩秋のある朝、突然にその思い出がよみがえって来たのだろうか。しかも、そういう朝にかぎって霧が深いのも、なにかいわくがありそうな気がしてならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook